

## 【京都府青少年育成協会会長奨励賞】

「老犬が教えてくれたこと」

京都府立洛北高等学校附属中学校 3年  
西本 栞



今日の日本にはたくさんのペットショップがある。そして、たくさんの動物たちが小さい箱に入れられて一日中過ごしている。いろんな人に見られ、「かわいいー」や「ほしいー」と言われながら……。人はきらびやかなところに目が行きがちで、それにかき消されてしまっている問題点には不思議と目が届かない。例えばペットショップに売られている犬たちは皆健全な子犬たちであって、その中に老犬はいないという点も。本当なら売れ残りの年を取ってしまった犬、もともと病気持ちの犬などがいるはずである。しかし、奇妙なほどに子犬しかいないのだ。ペットショップで売れ残った動物たちは、多くの場合、捨てられるか、殺されるかだろう。それはなぜだろうか。子犬ではないとかわいいとお客さんに思ってもらえず、商売にならないという考えからだろうか。経済的な利益追求の理由で動物たちの命を捨てているのだろう。少しでも年を取ってしまい、お店にとって役に立たないと判断されてしまった犬の命は非常に軽く見られる。私はこのような事実がとても悲しかった。

しかし、老犬でも大切にお世話されている場所がある。京都の動物愛護センターである。京都動物愛護センターのホームページでは、捨てられたり、迷子になって、センターに収容されて、一般家庭へ家族として受け入れを待っている犬たちの写真を紹介している。犬たち一匹一匹にかわいい名前をつけて、かわいい写真で紹介している。その犬たちの紹介を見ると10歳以上の犬も多く保護されていることが分かる。また、京都動物愛護センターには病気を持っている犬も何匹かいる。病気の犬も新しい家族に出会えるまで大切にお世話している場所があるのかと、私は感激した。

私はその動物愛護センターから去年、犬を譲渡してもらった。14歳という老犬で、「しろう」という名前をつけてもらっていた。少し大きい犬だったので、母が「しろう君を家族におかえいれようか」と提案した時、私はちょっと不安だった。しろうは過去に一度、ほかの家族に譲渡されたが、年を取っていたのでトイレをよく失敗してしまい、センターにかえされてしまっていた。そのことで動物愛護センターの職員の人たちも、私たち家族としろうがうまくいくか、不安を持っていたようだった。しかし、実際に家に来てみると、初めに持っていた不安よりもその子との生活の楽しさの方が一気に増してきた。もともと私の家では前に犬を飼っており、その子の老後のお世話などもしていたことがあり老犬介護には家族みんなが慣れていたので、ちょっとやそとの介護の問題にはびっくりしたり困ったりしなかった。家族みんなで協力して、しろうのお世話をした。しろうのお世話が大変だったというより、「しろうと一緒にいて楽しい」という気持ちのほうはずっと大きくなっていった。しかし、譲渡してもらってから数ヶ月後、しろうは突然肺炎にかかってしまい、それは急速に悪くなっていき、しろうは死んでしまった。まだまだしろうにやってあげたいことも、しろうと一緒にしたいこともたくさんあった。だから私はとてもつらく悲しかった。

年を取った犬を飼うなんて楽しみなんか全然ないんじゃないのかと思う人がいるかもしれない。でも私はそんなことは全く思わなかった。介護は少し大変かもしれない。しかし、子犬ならではの良さがあるとともに、老犬ならではの良さもあるのである。そして、私はその良さをたくさん見つけることができた。実際にしろうとの思い出は介護でのつらいものではなく楽しいことばかりであった。しろうは子犬ではなかった。私たち家族にこんなにも素敵なお世話を残してくれたのだ。ありがとうとどんなに言っても足りないほどである。

老犬だから、病気が犬だからと、あきらめてほしくない私は思った。無理に飼ってほしいというのはない。ただ、そのような犬たちがいるということを忘れないでほしいのだ。そして、飼い主になってくれる人を待っているということを知ってほしいのだ。どんな動物も、年を取っても病気になっても命の重さは変わらない。そして言いたい、命の重さを人の基準で変えないでと。